



第41回 健康と病気のあいだ ー田中泯という人ー

▼田中泯という人

先日、サワコの朝に田中泯さんがでていた。「たそがれ清兵衛」「まれ」などで存在感のある演技をみせる個性派俳優でもある。泯さんの本業は舞踏家であり、世界各地で「場おどり」という独特的な舞踏をおこなっている。場おどりとは、何かしらを感じる場にあわせ即興で踊りをおどること。田んぼで、パリの街角で、インドネシアの田舎町で、といった具合だ。印象に残ったのは、「踊りに言葉はいらない。喜びとか怒りとか、純粹で完全なものなんてない。喜びから怒り、怒りから悲しみまで、ずっとグラデーションのように感情はあって、そのすべてがいとおしいんだ。踊りはそれを伝えられる。今の舞踏は言葉によって形式化されすぎている。本来の踊りは、人間が言葉を持たない時代から喜びや悲しみを表現するものとしてあった。だから自分は踊ることを大事にしたいのだ」。このやりとりを聞いていて、この人はまことに面白い、と思った。

▼言葉の功罪

言葉はコミュニケーションの手段として最高のものだろう。言葉があってこそ、技術伝達や教育が可能となる。でも、人間は非言語的なコミュニケーションで、相手の気持ちをはかっている。「いかがですか?」とたずねたとき、患者さんが無表情で「大丈夫です」と返されたら、何か事情があるのかなと思う。この非言語的な部分は、表情や声音、身ぶりなど、さまざまな身体表現として現れる。もともと、言葉というのは、世界を解剖する(分ける)ために生まれた。ひとつひとつの要素に分解して、そのブロックを組み立てなおすことにより、頭のなかで世界を再構築するのだ。しかし、こころとからだ、健康と病気、生と死、2つの間にはきれいに切り離せない稠密なグラデーションがある。でも言葉にしてしまうと、人間は2つをまったく異なるものと思い込んでしまう。

▼健康と病気

完全な健康、完全な病気、なんてない。じつは健康な人も病をかかえ、病気の人も健康な部分をかかえている。「ゆく川の水は絶えずして、もとの水にあらず」、人間は死につつありながら生きている存在だ。分子生物学者の福岡伸一氏は、「人体の構成成分はつなに入れ替わり、細胞も死んで再生されるという動的平衡状態にある。だから動的平衡そのものが生命なのだ」という。そう考えると、「〇〇病」というのは平衡状態の乱れにすぎないともいえる。しかし、言葉の力は強力である。昨日まで健康だったあなたは、今日から〇〇病とラベルされる。言葉が決めつけ、言葉があなたを仕分けするわけだ。自らの状態を、健康か病気か、という白か黒かではなく、グラデーションを行きつ戻りつする浮舟のような存在と考えることはできないものだろうか。田中泯さんの「場おどり」のように、ときには言葉をいったん留保してみる。そこにまったく新しい健康観が見えてくるんじゃないかな、と思っている。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)